

## 大分・大山寺普賢延命菩薩像の造像背景

## — 「国司随身の僧」としての谷阿闍梨皇慶をめぐる —

森瑞穂 (九州大学)

大分市・大山寺の普賢延命菩薩像 (以下、本像と記す) は、神仏分離以前、豊後国一宮柞原八幡宮 (由原宮) 普賢堂本尊として伝来した。内削りをほどこさないカヤ材の一木造りだが、量感を抑えた体軀や脚部の同心円状の浅い翻波式衣文、頭体幹部と脚部とを相欠き状に矧ぐ構造などから、十世紀後半から十一世紀前半の作とみられている。普賢延命菩薩は除災や延命を祈る尊格として宮廷社会でさかんに信仰されたが、現存作例は少なく、本像はその最古級の作例として重要である。また、彫像に類例の少ない本像の臂釧の形状は、高雄曼荼羅、四種護摩本尊並眷属図像、胎蔵図像や黄不動など、東密・台密双方の規範性の高い図像に通じ、図像的特徴として注目される。

従来本像の成立事情は不明とされてきたが、発表者は柞原八幡宮伝来の「豊後国由原宮宮師皇慶解」という平安時代の史料に造像主導者と制作年代を明らかにする糸口をみいだした。当史料によると、皇慶という人物が寛仁四年 (1020) に豊後国の裁定で宮の統括者・宮師となり、治安二年 (1022) から万寿四年 (1027) の間に国司息災を祈る祈祷をおこなっている。本像の様式から推定される制作年代に含まれる時期のこの記録は、増益延命の利益を持つ本像の成立を考える上で看過できない。

発表者は、この宮師こそ、台密の大成者として知られる谷阿闍梨皇慶 (977~1049) である可能性が高いと考える。皇慶は播磨書写山円教寺を開いた性空の俗甥で、台密のみならず東密の系譜にも連なる当代一流の事相家である。密教に通じた皇慶は、規範性の高い図像を参照したとみられる本像造像の主導者として適格であると思われる。

また、大江匡房撰『谷阿闍梨伝』によれば、皇慶は都から赴任地へ向かう国司に帯同し、国司や国の安寧を祈る修法をおこなう「国司随身の僧」であったことが知られる。特に、皇慶には、時の最高権力者藤原道長との親交を背景に、若年より摂関家家司の「国司随身の僧」を勤め、伊予で国司のために普賢延命法を修した実績がある。豊後を含む生産力の高い上国や大国の受領職を独占した摂関家家司の赴任地での造像と儀礼の記録を勘案しても、普賢延命菩薩は国司息災を祈る本尊として最もふさわしい。

さらに、皇慶は八幡信仰との接点をも有していた。聖教の奥書などによれば、彼は八幡信仰の場であった筑後国高良大社護皇院や太宰府竈門山大山寺で活動し、大山寺では宇佐八幡宮住僧から受法している。柞原八幡宮は宇佐八幡神の託宣を受けた比叡山僧金亀による開創譚を伝え、皇慶がその宮師となる可能性は十分に想定できる。

以上より、本像は豊後国司に随身し由原宮宮師に就任した谷阿闍梨皇慶によって、治安二年から万寿四年の間に、国司息災を祈る修法の本尊として造像されたと考えられる。本発表を通じ、平安時代中期の地方における「国司随身の僧」による造像の一様相を明らかにしたい。